

## 創造性のある教育を目指して 美術教育がもたらす人間形成についての一考察

### Aiming for creative education A study on human formation that art education brings

大場 六夫  
Mutsuo OHBA

#### 概 要

自由な絵を描きなさいと言われて、すぐに描ける人は少ない。それは上手く描かないといけない、他人から観て評価されることを意識することが要因である。何を描けばよいか想像できない、描く自信がない、そうして最後は、絵を描くことが苦手、嫌いに至る。幼少の頃、絵を描くことを楽しんだはずだが、どのようにして絵を描くことが嫌いになったのか。現代社会において絵を必ずしも描かなければいけない人は、美術・デザインに関与している人だろう。近年、自由な絵が描けない人が多いのは、感性や想像力が乏しくなっているのだろうか。想像力の基となる美術教育は、絵を描く技術を高めるだけでなく、知育・徳育に関わる人間教育である。そこで本稿では、美術教育と人間教育の関連を考察する。

キーワード：落書き、美術教育、人間教育

#### I はじめに

3歳の子どもが、絵を描いている姿はとても楽しそうに見える。3歳の子どもにクレヨンと画用紙を与えると、心の中にある喜びが、自由な自己表現で自発的に描きだす。その姿は、心の中にある意欲や楽しさが創造となって、心の底から湧き出る想像で夢中になって表現をしている。筆者が描画表現の指導している松井ヶ丘保育園（京都府）で3歳児52名を対象に行った自由に絵を描く遊びにおいて、幼児の多くが以下のような姿を示した。

- ・90分でB4判の画用紙を5枚も描いた幼児が2人いた。
- ・最初は画用紙で描いていたが、物足りず服を脱いで体や顔にクレヨンで塗りだした。
- ・自分の描いた絵を私たちに見せたくて走り寄って、手を引っ張り誘導する子どもがいた。
- ・自分の描いた絵に穴を目の形にくりぬき、マスクにして教室内、声を出しながら走り回った。
- ・自分が描いた絵を見せ、説明をしたいため、先生達をとりあいになる。



3歳児は、普段の生活の中で自身の周囲、環境と関わりながら、そこに限りない面白さを見つけ、美しさや楽しさなど感じ、心を動かしている。絵を描くという行為は、心の中の感じたこと、考えたことを自分なりに表現することであって、自身の思いを親や先生に魅せることにより、気持ちを伝えることに満足感を覚えるからだと考えられる。岡田は、絵を描くということの意義について次のように述べている。<sup>1)</sup>

子どもが一枚の絵を描く目的は、恐らく、表現がうまくなること、造形の感覚が高まるため、そして美意識を育てること等々でしょうが、さらに最後のものを追いつめると、身をもって自由を体験することになります。それは、絵画製作とか図画工作を、単なる画技の伝達であるとするならともかく 子どもを伸ばす教育として位置づけするならば、どうしてもそうなります。人間の生きる最高の理想が自由にあるからです。

また、子どもの表現について、磯部は次のように述べている。<sup>2)</sup>

大人が考える絵とは、イメージが先にあって、または表現したいものが先にあってそれを描くというのですが、子どもの絵は、はじめに描きたいことやイメージがあるとは限りません。とくに幼い子どもほど、先にイメージがあるのではなく、描きたいという行為が先に現れ、描いている過程でイメージが生まれ、色や形ができあがっていくということがしばしば見られます。ですので、幼児の絵は、行為を楽しんでいることと、イメージを伝えようとしていることが、絡み合っている場合があります。とくに、スクリブル期の子どもの絵は、表出といわれ、それは表現ではないとされてきましたが、現実の子どもが描いている過程を見てみると、それは間違っていることがわかります。なぜなら、「スクリブル」や「なぐりがき」といわれる絵の中にも、描く過程の中で、その子が表したいイメージが生まれ、それを表そうとしているものが見られるからです。

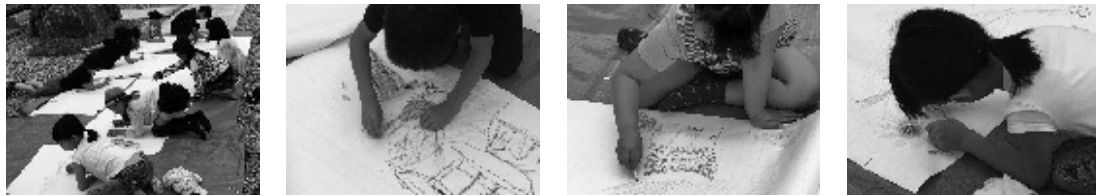
子どもは、絵を描くことで、内面を生き生きとさせて楽しんでいる。その活動は、無意識といわれる心の領域まで踏み込んで躍動している。この時の状態は、子どもの情意面での成長につながっている。それは、絵を描いている子どもの表情や発言の内容から、把握することが出来る。こうした活動は、人間教育の礎であり、知識や技能と言った知育面だけでなく、心の育ちである徳育においても大切な役割を占めている。

## II 表現活動（絵を描く）の楽しさの消失

### (1) 小学校高学年の「落書き遊び」

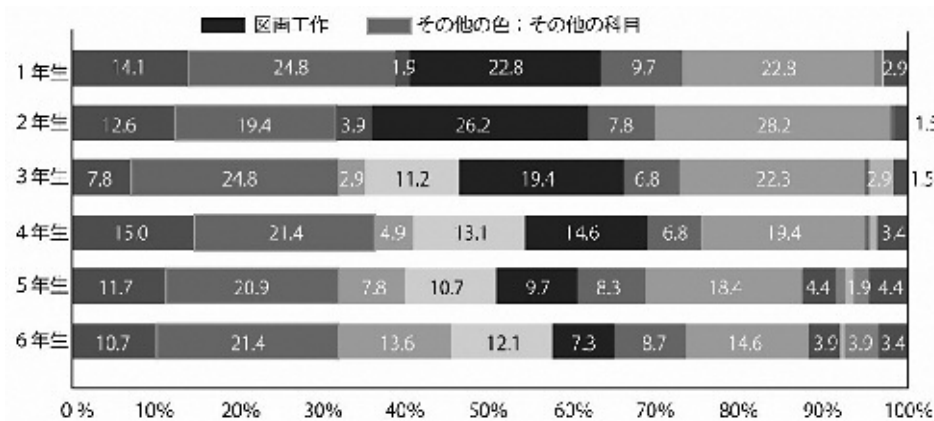
筆者は、2019年6月に常念寺（京都）の境内において、小学校高学年の子どもたちと「落書き遊び」の企画を行った。これまで幼児の落書き遊びを指導してきた筆者にとって、当日の子どもの様子は予想外の出来事であった。それは、参加した子どもたちはほぼ全員から、発せられる言葉が「先生、何を描いたらよいの、分からない」だったからである。筆者がクレヨンを配布しても、箱から出そうともしない子どももいた。残念なことに、指導者側が、強制的に絵を描かしているかのような、落書き遊びになってしまった。彼らが描いている様子も、さほど楽しそうではなかった。わずかに描いただけで、「もう、できた」と言って作業をやめてしまうのである。3歳の保育園児と一緒に取り組んだ落書き遊びでは、出会ったことがないような姿や発言が飛び出した。

この「落書き遊び」の結果、仕上がった絵の題材は、寺の境内にある石灯籠や池やそして草花等に偏ってしまった。それを見た筆者と寺の住職は、これは落書き遊びでなく、写生会になってしまったと呟いた。



なぜ、3歳の頃、楽しく絵を描いて、絵を描くこと自体が、生きる喜びのようであったのが、年齢が高くなるにつれて、それらが失われてしまったのだろうか。学校教育を受けて小学校高学年になると、学習指導要領に沿った図工指導を受けているはずである。学習指導要領においても創作の楽しさを強調しているが、どうして自由に絵を描く楽しさを姿に表さなくなったのだろうか。筆者は、学校での学習過程において、子どもの心に変化をもたらす要因が存在していると考え。そこでまず小学校の授業における、児童の教科の好き嫌いを調査した以下のデータから、図画工作科への児童の意識を考えることとする。

#### 【小学生の好きな科目】

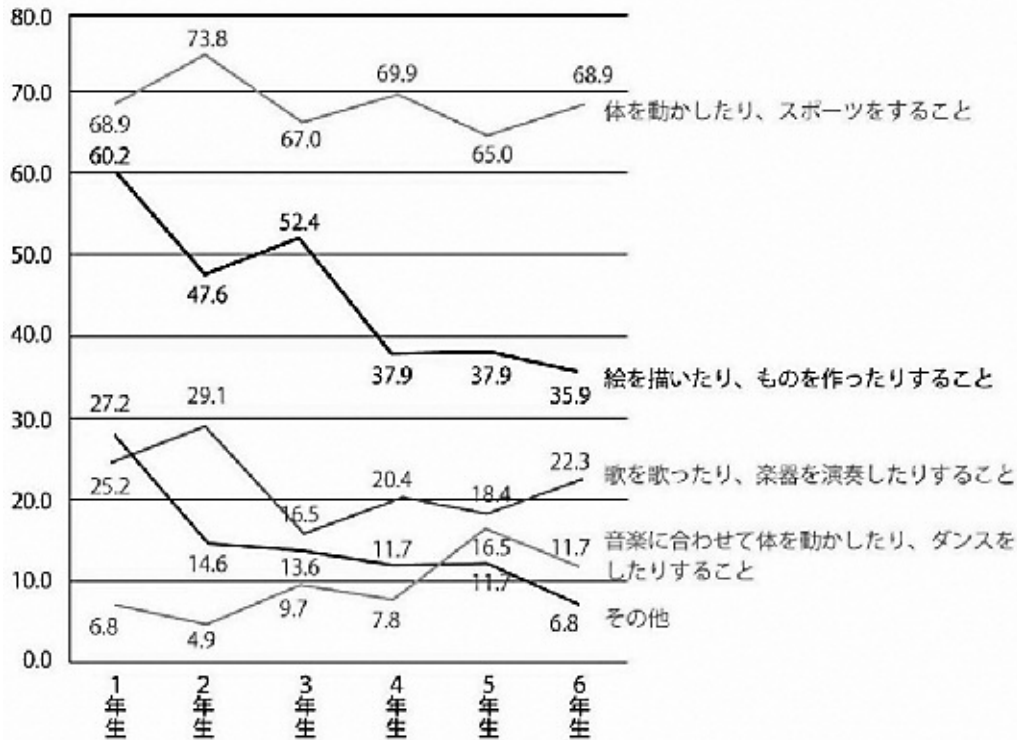


学研教育総合研究所「小学生白書」2013年

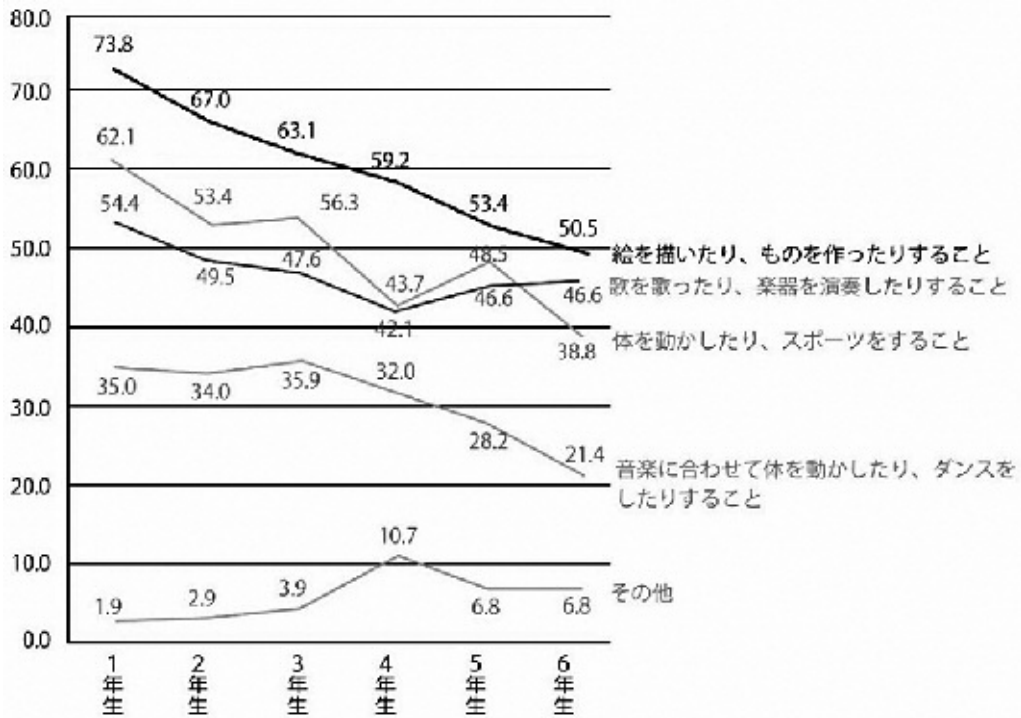
図画工作以外の他の教科においては、教科への好き嫌いという感情は、6年間通して、それほど大きな差が出ていない。しかし、図画工作の授業は、1年生の時には好きな科目として22.8%であったのが、6年生の時には、7.3%と急に落ち込んでいる。この落ち込み方は、他教科と比較すると顕著である。小学校高学年になるまでの6年間に、どのような指導があり、児童の心の中の何が変わったのだろうか。

この現象をもっと深く掘り下げるために、小学校6年間で好きなことの変化を表したデータを、同時に参照して傾向を分析することとする。

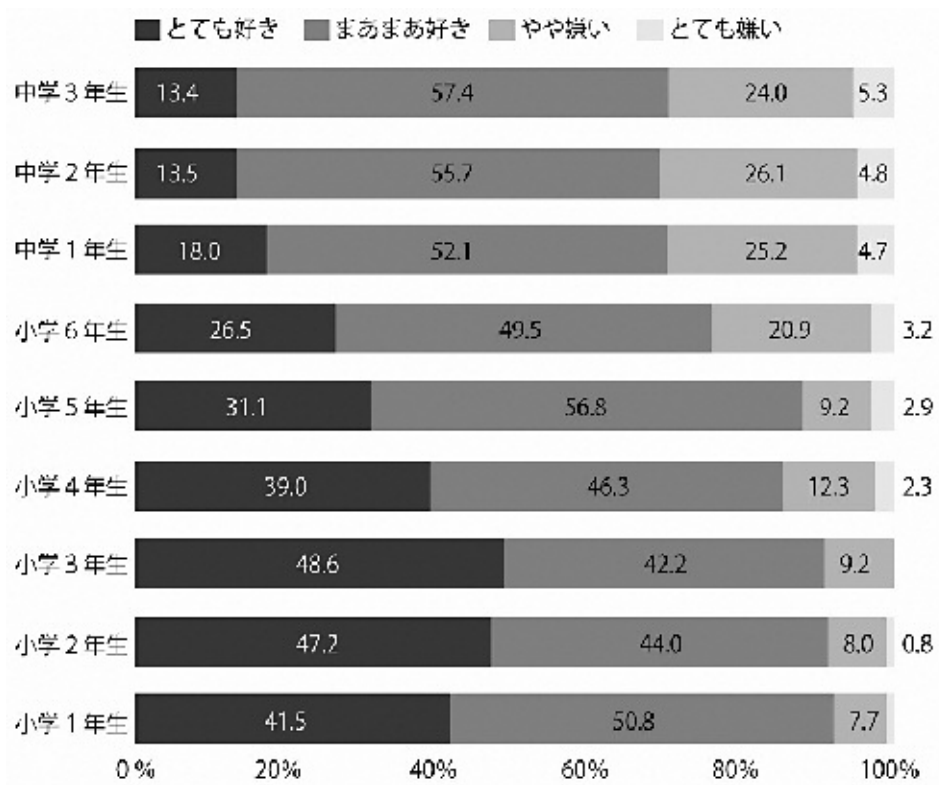
【小学生の「好きなこと」(男子・複数回答・%)】



【小学生の「好きなこと」(女子・複数回答・%)】



保護者対象アンケート【お子さまは、「図工」または「美術」の授業が好きですか？（学年別）】



ベネッセ教育情報サイト（2012年2月）

児童の「好きなこと」として「絵を描いたり、ものを作ったりすること」の割合が、小学校の「図画工作」の好きな科目の割合が下降するのと同様に、まるで正比例するかのように数値が下がっている。この現象は、学年が上がるにつれて、明らかに図画工作や美術に対する好きな気持ち＝興味・関心・意欲が低下していることを示している。

(2) 「落書き遊び」や「造形遊び」に意欲を喪失した要因

では、どうして小学校の児童の学年が上がるにつれて、図画工作が好きでなくなっていくのだろうか。平成27年告示の小学校の学習指導要領解説 図画工作編を見る限り、幼児の「落書き遊び」や児童の「造形遊び」は教科の目標(1)の「対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解する」や「材料や用具を使い、表し方を工夫して創造的に作ったり表したりする」に結び付いている。また育てたい資質・能力として「学びに向かう力・人間性等」では「作り出す喜び」や「感性を育む」ことにより「楽しく豊かな生活を創造」態度を育成し、最後は「豊かな情操を培う」が目標となっており、これとも関連している。

文部科学書の学習指導要領の目標や指導方法は、「落書き遊び」や「造形遊び」と関連するものなのに、どうして学校現場にその指導が反映されていないのだろうか。これは美術を専門とする筆者の私的な意見であるが、小学校の図画工作科の指導方法に若干の問題があるのではないだろうかと考える。図画工作科の教育では、教師の言動や教師自身の絵に対する見方や考え方が、児童に対する指導方法の態度や発言に顕著に反映することが多いからである。そのため本来は、小学校の低学年から、図画工作科に対し専門的な知識や態度を身に付けた教員の配置が望まれる。しかし現実には、小学校では高学年になり、やっと図画工作科の専科教員が指導することが多い。低・中学

年は、専門的知識を備えていない担任教育による指導がほとんどである。また小規模校では、図画工作科の専科教員が配置されないこともある。誤解のないように付け加えるが、筆者は美術の免許を持たない教員が、すべて専門性を持たないと言っているわけではない。

この指導者側の問題は、絵の指導に対しての、技術的な問題への困難さにあるわけではない。児童自身が感性や想像力を働かせて感じ取ったり考えたりして絵を描いた時の、心の様子を受容しようとしなない、認めようとしなない指導者の態度や言葉にある。そのため児童自身が描いた絵を否定された気持ちになり、自らの存在までもが否定されているように受取ってしまう。その上、友達との比較や技術的な評価が関わってくることで、楽しく描いていた気持ちが減少し、指導者の思い通りに描かされているという気持ちに変わって行くと考えられる。

これについて、伸びる生命の力こそ、子どもの基本であることを、岡田は次のように述べている。<sup>3)</sup>

私たち大人にもまして生命の伸びる力の旺盛なのは子どもです。子どもが精神面で、そして肉体の上で、ぐんぐん伸びる可能性に恵まれていることは論のないところですが。山上の沼はじっと静まっているだけでは水のエネルギーとはなりません、ひとたびその水が流れ出すと大きな力となります。家を流し田畑を潰す減させる暴力にもなるし、発電所の動力ともなります。そこで水はまず動かなければエネルギー化されないということ、そして次は、その力をどう使うか、利用するか、という問題となります。子どもも同じではないでしょうか。まず内から湧く生命力、それを大切にしたいではありませんか。多くの母親たちは「伸び伸びした子になってほしい」と我が子に希われる。先生もそうです。そして伸び伸びとは、内から湧く生命の力のほしいまなる姿を指す、と私は思うのです。

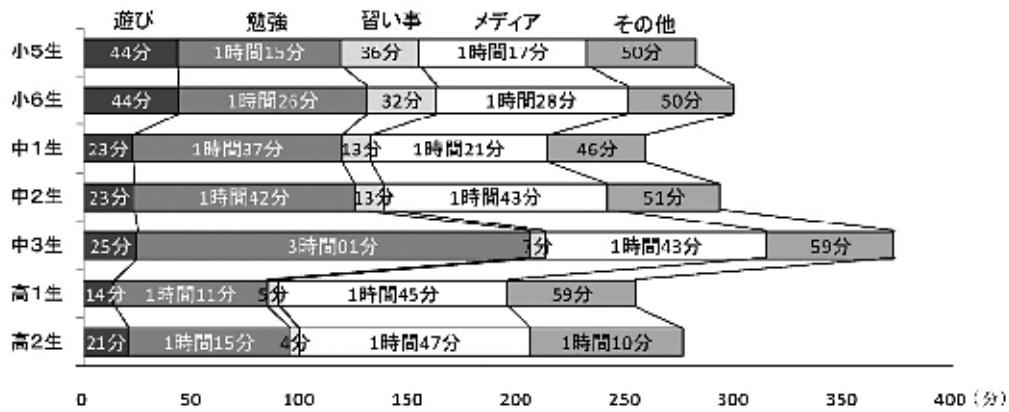
2番目の弊害として考えられるのは、社会的な背景の変化に伴う、子どもの生活時間の様相である。子どもの1日の生活時間が、図画工作にどのような影響を当てているかを、以下のデータで考察する。

#### 【1日の時間配分】



このグラフによると、子どもが学校以外の自由に使える時間として放課後の時間が、小学校では約4時間から5時間しかない。では、子ども達は、この貴重な自由時間をどのように過ごしているのだろうか。放課後の過ごし方に焦点を当てて、次のグラフで見ることにする。

【「放課後の時間」の内訳】



第61回日本教育社会学会大会 早稲田大学 Ⅲ-10部会 発表資料 (2009/9)

前者の時間配分データから、子どもは1日の内、学校にいる時間がとても長いことがわかる。小学5年生の時から高校2年生に至るまでほとんど同じで、7時間以上にも及ぶ。気になるのが、どの学年に於いても「遊び」の時間が1時間にも満たしていないということである。後者の放課後のデータから、学校での勉強以外に、家に帰ってからも勉強や習い事とあって、子どもたちの成長発達に不可欠である、自由に活動できる時間が不足していることが分かる。では、子どもはどのような習い事をしているのだろうか。

ミキハウス子育て総研が2018年10月「通わせていますか？習い事」(Weekly ゴーゴーリサーチ 第853回分析結果)によると、男子は、1位 スイミング・2位 英語・英会話・3位 学習塾・4位 習字・5位 サッカーとなっている。女子では、1位 スイミング・2位 ピアノ・3位 英語・英会話・4位 学習塾・5位 体育・体操である。ここでも絵画教室に通うといった、図画工作や美術に触れる習い事が全く含まれていない。その上、2017年ベネッセ教育研究所「学校外教育活動に関する調査」によると、「音楽・芸術(美術)活動よりもっと勉強をして欲しい」という親の希望が、小学生45.2%、中学生47.9%、高校生46.1%に上る。

受験を控えた中学校や高校においては納得する部分もあるが、学びのスタートである小学校時期までもこの調子では、図画工作科や美術の将来は厳しい。

習い事は、子どもの意志を反映せず、親がやらせたい事をさせている傾向が強い。この原因の一つに、晩婚化が進み少子化となり、その子に対し過度な期待をしてしまうためという説もある。親の選択した活動は、子どもが自ら興味関心をもって取り組んでいるとは限らないので、自分で楽しさを見出せないことがある。その結果、飽きてしまう傾向があり、その状態が長く続くと嫌になるだろう。このようなことの積み重ねが、自分の意思で行動をするという機会とともに意欲を奪い、自己表現も受動的となり表現力の欠如につながり、主体性のない受け身の人間を育成することになる。

#### IV 子どもの健全な育成と図画工作教育

##### (1) 小学校学習指導要領(平成27年告示)から

小学校教育において育成すべき資質・能力とは、生きる力といわれている確かな学力、健やかな体、豊かな心を統合的に捉え構造化したものと記されている。確かな学力と言われる、学力の要素は知識や技能だけでなく、それを活用する思考力、判断力、表現力、そして、主体的に学習に取り組む態度、この3つを学力とされている。その要素と関連して、学校教育における育成すべき資質・能力として3つの柱を掲げている。生きて働く知識・技能の

習得、未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養である。これらを踏まえ幼児教育ではこれらの基礎を育むとしている。

幼児の知識及び技能の基礎とは、生活や遊びの中で豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、わかったりすること、自分の心に響くことで、いずれ知識や技能となることを自分の中に取り込んでいくことである。思考力、判断力、表現力等の基礎というのは、その気付いたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすることである。そして学びに向かう力・人間性等は、これまでの活動を通して心情、意欲、態度が育つ中で、より良い生活を営もうとする意欲や態度である。こうして、幼児は様々な活動を積み重ねていく中で、嬉しい・楽しいという思いだけでなく、悲しい・悔しいといった自分の思い通りにならない体験や、やり遂げた達成感・満足感などの様々な感情を繰り返し経験し、葛藤しながら自己をコントロールする力を身に付けて、成長するのである。

## (2) 改善の方向性

目標である思考力・判断力・表現力等を高めるための改善方向として、図画工作では、表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにすることが大切である。それらを通して創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う必要がある。美術においては、表現及び鑑賞の活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てることが重要である。そして感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う必要がある。先述してきたように、今日の日本の児童生徒の生活における、図画工作や美術との疎遠な状態を乗り越えなければならない。そのためには、幼児期では「落書き遊び」等を通して、学童期では「造形遊びを」通して、図画工作や美術が日常生活を豊かにするのに、役立つものと実感しなければいけない。それには、まずつくり出す喜びを、児童生徒が味わわなければいけないと筆者は考える。

## (3) 「落書き遊び」から「造形遊び」へ

筆者が幼児に「落書き遊び」を指導した時は、人が本来備えている生き生きとした姿を見ることが多かった。同様に幼児が遊ぶときも、自分から身の回りの世界に働きかけ、そこからヒントを得て自分の思いを具体化している。例えば、どんどん描き進み画用紙を継ぎ足したり、画用紙に飽き足らず自分の全身を対象に色を塗り始めたり、描画に穴をあけてお面にして新たな遊びを生み出している。つまり、自分の思いを具体化するために、必要な知識や技能を自ら工夫し発揮しているのである。心と体をつなげて、全身的に関わりながら多様な試みを繰り返しながら、幼児はこのように成長するのである。

幼児の「落書き遊び」の特色を、小学校の「造形遊び」に取り入れることを、筆者は推奨する。学校においても、児童が材料に進んで働きかけ、自分の感覚や行動を通して感じた形や色などから、イメージを発展させるのである。それを何度も繰り返すことにより、技能も身についてくるのである。指導者が、良いとするものを指示する、描くテーマや主題・内容を決めるのではなく、児童が、材料や場所や空間と出会い、それとの関わりながら過去の経験を活かして、自分なりの目的をもって、活動を発展させる。

「造形遊び」は、幼児期の「落書き遊び」と違って、単に遊ぶことが中心ではない。進んで取り組みたいという楽しむ意識を持たせながら、資質・能力を育成する教育的な意図的な学びである。学びであるなら、造形遊びを指導する教師はどのようなことに留意して指導をするべきかを、「落書き遊び」の指導を参考に述べることにする。こ



の造形遊びは、材料の質や量、活動する場所・空間などに大きく影響を受けるので、指導者がそれらの関連を検討し計画を準備しなければならない。また「落書き遊び」も「造形遊び」もつくる過程自体を楽しむものであり、つくっても途中で考えが変わって、またつくりかえる試行錯誤の連続である。児童は材料や場所・空間などから造形的な活動を思いついて行動するので、指導者は児童が納得するまで、自分らしくやりきる時間を保証しなければならない。また材料や活動場所や空間も、狙いに沿って十分な準備をしていただきたい。

## V まとめ

以上、幼児期の生き生きとした「落書き遊び」等の活動が、児童期に入ると減少する要因について、社会的な背景と、学校教育を巡る問題との2点から述べてきた。さらに幼児の「落書き遊び」と児童の「造形遊び」の連続的な指導が、子どもが、美術を通して成長するうえで重要であることを論じてきた。

「落書き遊び」と「造形遊び」の共通点は、どちらも、自分の心の奥底の内面を、素直に表出する活動である。考えていること思っていることを表出するためには、意識的に自己の内面と向き合わなければならない。「落書き遊び」も「造形遊び」も、外面的に子どもが生き生きと活動しているように見えても、そうした活動に内的な必然性があるかどうか、さらにはそうした活動を通して本当の充実感が得られるかどうかの問題である。

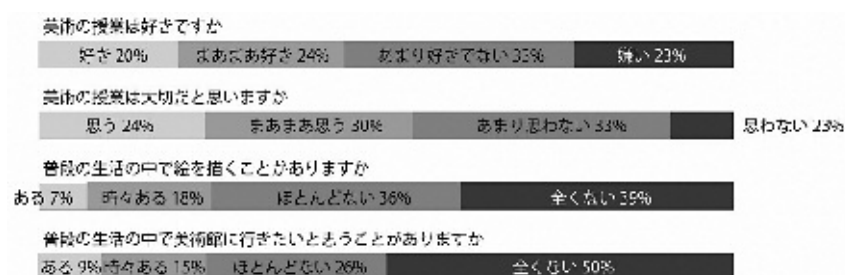
そのためには、指導者は子どもの外面の見える姿だけでなく、一人ひとりの内面世界にこだわらなければいけない。この内面にこだわって指導する教育こそが人間教育だと筆者は考える。子ども側では、いつでも自分の本音の世界で考える習慣が、ついていなければいけない。本音の代わりに「先生はどんな絵や作品を良いと思っているのか」を気にして作っては、こざかしいものになってしまう。

子どもの人間的な成長の姿の、核心部分は内面にあるのだから、本当の教育を考えるならば内面に配慮しなければいけない。本来は自己の内面と向き合い成長することは、大学生に最も求められべきだが、そのためには幼児や児童の頃からその習慣をつけなければならない。図画工作や美術は、内面を見つめ表出する習慣をつけるには、最もふさわしい科目であると筆者は考える。

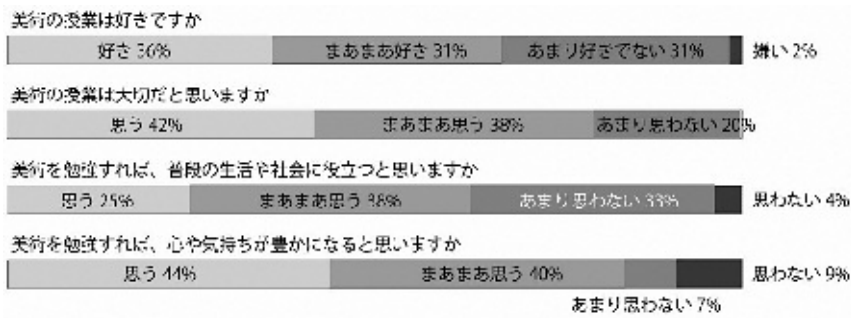
そこで、現在筆者が、授業を指導している大学生を対象に、美術に対する意識をアンケート調査した。大学生になると、美術に対しての好き嫌いや行動様式も固まり、なかなか変化をしない傾向がある。しかし、筆者は大学生に対し、一人ひとりの内面を大切に「造形遊び」の理論に基づく指導を、15回積み重ねてきた。すると、以下のような内面性を支える4項目「美術の授業は好きか」「美術の授業は大切か」「美術の授業は役立つか」「美術は心豊かに関連するか」について、若干の変化が見られた。

小さな限られた範囲の実践と調査であるが、指導の在り方により、美術教育の学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養に繋がることが明らかになった。

### ①【奈良学園大学人間教育学部1回生94名（2019年4月スタート時のデータ）】



【奈良学園大学人間教育学部1回生94名。筆者の「美術の理解」で受講後7月のデータ。】



### 【引用文献】

- 1) 岡田清「幼児の絵と教育」 1977年 創元社 pp25
- 2) 磯部錦司「子どもが絵を描くとき」2006年 一藝社 pp72
- 3) 岡田清「幼児の絵と教育」 1977年 創元社 pp21

### 【参考文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編」2018年
- 2) 梶田叡一「内面性の人間教育」1994年 金子書房